

## 2012 正月山行 FSオプタテシケ山 テレマークスキーツアー

L: 栗山、秋元

12月30日

朝、5:30に拾ってもらい、殆ど寝ていない秋元の運転で無事白金温泉到着 9:30 曇り。10:00 出発。長〜い林道の始まりだ。うっすら残った誰かのトレース沿いに進む。舗装路から林道へ入るとすぐに地獄のラッセルが始まった。うっすらトレースを使っても膝ラッセル。進まん！15〜20分交代でラッセル。こんな時、千葉さんが居てくれたら！っと叫んでも、千葉さんは風邪で欠席〜。2人は辛い……。ツアービンディング（秋）VS 普通ビンディング（栗）って問題かどうかは判らんが、オラのラッセルは進まんのである……。我々は時速1キロと言う、要介護スピード（青信号で渡れないらしい・・・）で黙々とラッセルするのである。

15:30、時間切れ〜！何とまだポン水無川までも達していない……。まあ、1日目だし2人だしテレだしストックじゃないし、と言い訳し、林道脇のデカイ木の間でC1。

12月31日

5:30 起床予定が寝坊。6:00 起床 8:00 出発。ガスガスの小雪。1時間程でポン水無川。ここから、左岸を登る。全くもって、昨日より酷いラッセル！登りの太ももラッセルである。しまいにゃ時速0.5キロと言う、虫状態。

そこに、神の助けが！誰かのトレース発見！よ〜く見ると、ツボ足？細い？4本？鹿？……とにかく、使わせてもらう。突然、ギアチェンジ！猛然と2番手のアッキーを引き離しにかかる。しかし、こいつのライン取りが何とも曲者。“鹿く〜ん！”と叫びながら、でも楽チンだから、離れられな〜い……。

さすがに鹿くんアシストも突然谷へ向かってしまう。そうね、君は山屋じゃないのね……。なんちゃって山屋の我々は上に向かわねばならないのであった。

14:00 森林限界を超えてC1400 付近。風は無いのだが、ガスっていて視界無く、雪の量も1メートル以下と雪洞は無理な状態。先へ行くか迷ったが、どのみち当初の山行予定はもう不可能と思うので、美瑛富士縦走は諦め、オプタテ西尾根滑り三昧に変更した。明日の天候次第で、オプタテの頂上は行ってみようと言うことで、滑り準備〜！いざ滑走〜！という所で、あつという間にガスが晴れて、何から何まで丸見え！！なまらキレイだ！

晴天の中、ちょっと難しい雪を滑って、C1260 付近の樹林帯でC2。

1月1日

またしても正月早々寝坊で 7:00 起床、晴れ。8:50 テント等はデポして、オプタテ頂上を目指す。昨日のトレースは殆ど消えていたがこの高度ではそれ程のラッセルは無く、快調に高度を上げる。昨日より風が強い。どんどん傾斜が増し、C1650 付近でスキーをデポする 11:00。

ツボで少し歩くが、思いのほか硬い所が有り、すぐアイゼンを付ける。風が少し有り、目出帽を車に忘れ、三角巾で銀行強盗の真似をしている秋元の顔が少し心配だ。クラストとバリズボの稜線をゆっくり進む。次第に視界が悪くなる。12:00、C1900 付近。頂上まで 1.5 時間位かな……。ギリギリだな……。なんて思って秋元の顔を見たら、あらあら鼻が真っ白！こりゃいか〜ん！って事で、下山〜！あつという間にスキーデポ地点へ。ここからシュカブラ急斜面を滑って降りるのは危険と判断（秋元は滑りたそうだったけど……）、シートラでC1550 付近まで下げて、滑走準備。今日は荷物が軽いので、気合いが入る。視界は完全に回復した。“2012 初すべり〜！”と叫んで滑り出し、2012 初転び〜っと前転一発かましてやりました。

テン場まで滑り、まだ少し時間が早いので、もう一本登り返し。C1500 付近まで上げて、再

びヤッホ～！ 15:00 テン場を少し改造し、屋根を増設してC3とした。

1月2日

今日こそは寝坊の汚名返上と携帯のアラームをセット、予定通り6:00起床に成功した。8:10下山開始。もう1ピッチ分程滑りを楽しみ、傾斜が無くなる。少し行くと、登りのトレース発見。トレースに乗りジェットコースターであっという間に林道着8:55。あんなに苦労して登ったのに僅か45分程で滑ってしまった・・・。

林道で一休みしていると、一時晴れ上がり、オプタテシケの雄々しい姿を見せてくれた。  
“あの斜面滑ったんだね・・・” っとしばし感傷にふけり、また長～い林道を下った。12:15車地点着。

今回、当初は新得側の斜面を滑る等、壮大な計画であったが、地獄のラッセルに阻まれ、オプタテ西尾根のみの山行となった。しかし、テレマークスキーでの長期山行の可能性を充分感じさせてくれた山行となった。また、今山行の一番の目的と事前に秋元と決めた、3泊は必ず山中で泊まる事、滑りを楽しむ事、の2点を充分満喫できた、とても良い山行であったと思います。今回、一緒に行ってくれた秋元に感謝すると共に、風邪で行けなかった千葉さんとも、今後この様な山行で一緒できればと思います。

(文責：栗山)